

《連載エッセー》

時代の感受性 (上)

加藤 純子



今号と次号、二回にわたって書こうとしているエッセーは極めて個人的視点から、いまの「児童文学」についての印象批評と雑感を綴った散文です。

かなり前から出版業界では慢性的な不況が続いています。児童書も一部のベストセラーをのぞき売れなくなっています。町の小さな本屋さんほとんどん消え、大きな書店もネット書店を相手に苦戦を強いられています。一方、児童文学は3・11やその後の政治状況などからさまざまな問題に直面し、それらとどう対峙しながら子どもたちと向き合っていくかという作家たちの模索もはじまっています。一方では、楽しい物語もたくさん出て来ています。

では児童文学の状況はどう変わってきたのか。とは言え、この時代のすべての児童文学作品を語ろうなんて、そんな大それたことは考えておりません。あくまでも二〇〇〇年あたりからの、「自分の好奇心」にひっかかったごく狭い

視点から、テーマを決めてふりかえってみようと思っ
るのです。

1、『子どもと本の明日 魅力ある児童文学を探る』から

二〇〇三年、日本児童文学者協会編で『子どもと本の明日 魅力ある児童文学を探る』（新日本出版社）という本を出版しました。その本を作ったときのコンセプトは「子どもたちの心をつかむ魅力ある作品は、どのようにしたら生み出せるのか」ということでした。編集代表は古田足日さんで、わたしも編集委員のひとりとして参加していました。そして第二章「おもしろさとはなにか 子どもにとってのおもしろさとは」について書かせていただきました。そこで書き手としての直感で二〇〇〇年〜二〇〇二年にかけて出版された「新しい」と感じた作品を取り上げました。わたしへの課題は「おもしろさ」でしたが、わたしにとっての「おもしろさ」は、すなわち「新しさ」でもありません。